

・近代戦争に関する資料を包括し、美術的・芸術的価値のある物をも含める。

以上が本館における資料分類の大よその内容である。

2

1で、浦幌町郷土博物館における所蔵資料の分類基準の概要を述べてきた。本館における資料の偏向性は否めない事実である。このことは、各部門内においても同様の事実があり、このことの克服と更なる豊富化が今後の課題である。実際に個々の資料にあたって、その内容性を検討してみるとこのことは一層明確となる。例えば、「考古」を例にとってみると、旧石器時代の資料は皆無、縄文早期の資料が大多数を占め、続縄文は少々、擦文、オホーツクも少々という内訳である。擦文文化期の資料については、十勝太古川遺跡、十勝太若月遺跡の一括資料が収蔵される予定であるので資料は増加するであろうが、旧石器時代の資料については今のところ見通しがない。

縄文早期の遺物が多いのは、本町の地域性によるものである。吉野台地上に位置する各種の縄文早期遺跡がそれを物語っている。更に吉野台地から東側に浦幌川をはさんで位置する台地上に位置する生剛遺跡等の舌状台地の先端部附近のものである。

もちろん、それ以降に位置付けられる各時期の遺跡がないわけではないが、全道的にその絶対数が少ないとと思われる前期の遺跡は極めて乏しいが、中期の遺跡は幾千世・常室地区等の内陸の比較的標高の高い地点に認められるし、後～晩期の遺跡については、瀬多来地区や十勝太地区に認められる。現在までの調査では、幾千世・常室・瀬多来等の諸遺跡は単純遺跡の可能性がある。これらの遺跡の正式発掘調査の計画はないが、本博物館にとって今後良好な資料を供出する遺跡として注目してよいであろう。

博物館園事業の一環として、こうした遺跡の発掘調査を手がけることも近い将来にはあるかもしれない。

(浦幌町郷土博物館)

浦幌町の発掘調査された遺跡

後藤秀彦

1

北海道十勝郡浦幌町一帯は、先史時代遺跡の多いことで著名である。殊に、その年代が縄文早期に集中しており、その量も豊富で学界の注目するところでもある。これらの遺跡は主として、吉野～共栄～生剛の地区に多く見ることができるが、また時代の下降した時期に位置付けられる擦文時代の遺跡については、十勝太から昆布刈石にかけての海岸線の小高い丘の上に聚落跡として密集して存在している。

ここで述べる浦幌町の発掘調査された遺跡は、前記した縄文早期と擦文文化期のものが全てであり、とりあげる遺跡は次のとおりである。

1. 浦幌新吉野台細石器遺跡 昭和25年

名取武光・齊藤米太郎

2. 下頃辺遺跡 昭和34年

泉 靖一・河野広道・吉崎昌一

3. 十勝太遺跡 昭和40年

渡辺 仁

4. 平和遺跡 昭和42年 45年

大場利夫・堀野 昭・重松和男・明石博志

5. 吉野遺跡 昭和46年

大場利夫・堀野 昭・後藤秀彦

2

浦幌新吉野台細石器遺跡は、故齊藤米太郎氏によって発見された。^①即ち、齊藤氏は小学校で教鞭をとりながら郷土史編纂のため、浦幌村シタコロベ（現：吉野、共栄付近）の調査を昭和9年春頃から実施した。この一連の調査の中で、齊藤氏は特殊な櫛目文尖底土器に細石器の伴出する遺跡の



浦幌新吉野台細石遺跡

存在を知った。その後も小規模な発掘と表面採集を続け、1943（昭和18）年『考古学雑誌』に本遺跡の概要を発表するに至った。この報文の中で齊藤氏は、本遺跡が二つの対象的な遺物の包含地であることを指摘している。

即ち、その一つは本遺跡の大部分を占める地域で、表面採集では大形石刃を、中層からは石核類を、そして最下層からは無数の小形石刃と石破片を包含するもので、小形石刃には櫛目文尖底土器が伴出したという。また、他の地域は平底無文土器を主体とする地区であったという。ここで齊藤氏は特に前者に焦点を合わせこれらの石器類が、本州各地出土の石器、即ち埼玉県浦和の大形石刃曾根の石刃、あるいは道内滝の上、遠軽、湧別川筋下湧別等の遺跡出土の石器との比較考察の重要性を述べている。

この齊藤氏の報告は、戦後群馬県岩宿遺跡ではじめて旧石器時代遺物を確認して以来急速に進展した旧石器時代研究の前史的意味合いをもつものであるといえよう。

齊藤氏による昭和18年の報告に基づいて1950（昭和25）年正式な発掘調査が実施された。この発掘調査は北海道大学理学部助教授名取武光氏と齊藤氏が主体となり吉野中学校生徒達の協力のもとに72坪の発掘をおこなったもので、石刃の先端を加工して作製された特殊な鎌と絡条体圧痕文を土器の頸部にもつ平底土器を伴出するかたちで発見した。この鎌は、1956（昭和31）年

芹沢長介氏によつて「石刃鎌」と命名されたもの^④で、土器は「浦幌式土器」と名付けられ、從来齊藤氏によつて「櫛目紋」「尖底」とされたのは誤りで「絡条体圧痕文」をもつ「平底」土器であることも判明した。この石刃鎌を主特徴とする文化は、その後吉崎昌一氏によつて「石刃鎌文化」と呼称されるようになりその後の「東神樂14号遺跡」・「富良野東山」・「湧別遺跡」・「女満別遺跡豊里地点」・「東釧路遺跡第II地点」等の調査に引き継がれ、その編年的位置と土器との判出関係をめぐって論争が続いている。

この名取・齊藤両氏が調査した遺跡は、その後「浦幌新吉野台細石器遺跡」と命名され、1951（昭和26）年9月6日に道指定史跡となつたが、正式報告書がまだ公表されていないため詳細は不明であり、タイプ・サイトとしての役割を十分に尽すことができないでいるのは、大変残念なことである。

3

昭和も30年代に突入すると、国土の再開発という美名の下で、遺跡の破壊は次第に顕著となってきた。1950（昭和25）年の朝鮮戦争の特需によって一気に戦後混乱からいあがった日本経済は、1960（昭和35）年以降の池田内閣の所謂る「所得倍増政策」のもとで国土再開発をうち出し、それに伴なう遺跡の大規模破壊は現在にまで続いている。こうした状況の中で1958（昭和33）年藤本英夫氏によつて静内町田原遺跡の調査がなされた。^⑪ここからは、一般に從来平底土器より古いと考えられてきた尖底土器（住吉町式土器）が上層から出土し、下層からは絡条体圧痕文・組紐圧痕文等約10種の文様構成をもつ土器（田原B式土器）とヘラ描沈線文・条痕文をもつ土器（田原A式土器）等の平底土器が出土した。この調査の結果は、あまり一般には受けつけられなかつたようであるが、同町マウタサップ遺跡においても河野広道氏によつて同様の結果を得るに至つた。さらに、夕張郡長沼町幌内タンネトウ遺跡の調査が、札幌西高校郷土研究部の手によつて行なわれ、田原遺跡で「田原B式」土器と分類されたのと同様の土器タンネトウE式土器を発見した。^⑫



下頃辺遺跡

以上の三遺跡の調査結果は重要である。従来考えられてきた「尖底土器は平底土器に先行する」という観念は崩れ、道内最古の土器追求の研究は新局面を迎えることになったわけである。そして尖底土器に代わって平底土器追求が提起され、吉崎昌一・芹沢長介両氏によって、道内最古の土器は、「田原B式」「タンネトウE式」土器であるという考えが明らかにされるに至った。

この平底土器追求の課題はその翌年再び大きく前進した。

東京大学文化人類学教室の泉 靖一助教授を主班とする「アイヌ学術調査団」の一一行は、国鉄根室本線新吉野駅付近（十勝郡浦幌町字吉野1番地）の工事現場で削りとられた崖面の中に竪穴住居跡の断面を発見した。¹⁰ 調査団は、河野広道・吉崎昌一氏らと調査団を再編成し、1959（昭和34）年9月この竪穴の調査を実施した。これが下頃辺遺跡である。本遺跡では、上層から田原B式土器が、下層からは横位のヘラ描沈線文をもつ平底の筒形土器が発見された。この土器は「下頃辺式土器」と命名されたが、田原遺跡で端緒的に現われた土器——田原A式土器——に近い土器が、「縄原体」を施文具として用いた土器よりも更に下層から発見されたことは重要であり、本土器の確認によって「田原B式」・「タンネトウE式」土器が道内最古という考えはわずかの間に修正されなければならなくなつた。そして、本型式の発見と出土状況により道内の縄文早期の土器につい

ての研究は更なる転換期を追えるに至った。この調査により北海道における縄文時代初期の土器の研究は三段階を経たことになる。即ち①尖底土器（住吉町式土器）が最も古いと考えられていた時期 ②田原B式・タンネトウE式土器等縄原体を用いた平底土器が最も古いと考えられていた時期 ③「縄原体」を用いず、条痕文、沈線文・無文を基調とした平底の土器群が最も古いと考えられている時期。以上が、現在に至るまでの研究の大略の要約であるが、③の時期は現在も続けられており、特に釧路地方における沢 四郎氏の細分により様々なパターンの型式が提出されている。

しかしながら、下頃辺遺跡についても正式報告書が刊行されていないためその全貌は今もって不明な点が多い。

4

浦幌町字十勝太から昆布刈石の海岸線に面した小高い丘陵上は、特に擦文文化期の聚落跡の密集したところである。

この一帯の遺跡は、前述した浦幌新吉野台細石器遺跡と同様に齊藤米太郎氏によって発見された聚落跡とチャシ跡が大部分であるが、その後の調査によても数多くの聚落跡が現存していることがわかった。齊藤氏の調査は主として、第二次世界大戦前に実施されたものであるが、この時の聚落跡、チャシ等等の実測図（略図）は今も浦幌町教育委員会事務局に保存されている。1964（昭和34）年創設された浦幌高校郷土研究クラブ（顧問・堀野 昭教諭）は、町内の遺跡台帳を作成すべくまず十勝太地区に目をむけ、十勝川口チャシ跡・大西牧場遺跡・河岸段丘遺跡等の諸遺跡の一般調査を二ヶ年にわたって実施した。この際収集した土器等は、浦幌高校郷土研究クラブと浦幌町郷土博物館に所蔵されているが、擦文式土器を主体として縄文土器が若干混入しているという状況である。

以上の三地点の中で、東京大学理学部人類学教室渡辺 仁教授の発掘調査した箇所は、「十勝太河岸段丘遺跡」として登録されているもののうちの2基の住居跡である。¹¹

報告された2基の竪穴住居跡の構造自体は四角形を呈した、カマド跡をもつ一般的な擦文文化期

の住居跡と異ならなかったが、焼土が住居跡内床面一帯に広範に分布すること、壁面にプラット・ホーム状のベンチが見られたことなど目新しい事実も確認された。

擦文文化期の聚落跡についての研究は、今後一基毎の竪穴構造を追求するよりも、聚落全体として——点から面へ——の規模と竪穴住居跡相互の関連を追求するいわば「共同体」の追求とそれに伴なう「共同体論」の構築に力を注ぐべきであろう。そうした中で、住居跡相互の新旧関係あるいは、相互関係等の問題もおのずから解明されるであろう。縄文時代解説の時期に発展した所謂の編年学派の継譜を擦文文化研究の中にまで持ち込むことには若干問題を含んでいるように思われる。

確かに土器という具象物は、時間的編遷を知るには最も都合のよい「もの」であるが、そのことに力点を置いてしまうと、考古学本来の目的を見失なってしまうような気がしてならない。これが筆者だけの思い過しだれば問題はない。

ともあれ、十勝川口一帯に密集して存在する竪穴住居跡群についての精査は今後に待つべきであろう。

5

平和遺跡は、浦幌町字平和85番地に位置する縄文早期の遺跡である。本遺跡の位置する丘陵は浦幌新吉野台細石器遺跡の位置する吉野台地の西端にあたる。この台地上にはこのほかにも共栄遺跡A・B・C・D地点など、縄文早期の遺跡が密集している箇所である。

本遺跡の発掘調査は²⁰ 1967(昭和42)年²¹ 1970(昭和45)年におこなわれた。しかし調査した地点も含めて遺跡全体は砂利採集のため煙滅してしまった。道東部の主要な縄文早期の遺跡である本遺跡は二度と調査不可能となり人の目に触れなくなってしまったのである。

本遺跡では第一次・第二次の調査で14基の竪穴住居跡が検出された。竪穴住居跡は円形の平面プランを基調として中に石囲みのない炉をもつもので遺物は、土器と石器である。二次にわたる調査の調査報告書によれば報告者の明石博志氏のいう「下頃辺式土器」とその下層から「下頃辺下層式土器」と命名された土器が出土したという。そし

てこの「下頃辺式土器」は、条痕文・貝殻腹縁文・刻線文・貝殻条痕文・隆起線文・擦痕文等多種の文様が施されているという。器形は底部のスンナリしたものと若干突出している物が多く頸部の分化はない。口縁は平縁のもの、小波状口縁のもの、波状口縁のもの等多種多様である。また「下頃辺下層式土器」は1967年の調査でローム層にくいこんで発見されたというもので、1970年の調査でその上下関係を確認しようとしたが、達せられなかつたものである。

しかしながら、ここでもう一度下頃辺遺跡の下頃辺式土器の概念を確認してみなければならない。下頃辺式土器について若干でも触れているのは吉崎昌一氏であるが、それによると「ひっかい²²た線の整形痕をもつ平底土器」であり、その姿は『日本原始美術』²³に掲載されている二葉の写真で窺うことができる。もちろんこれだけの記述と写真だけでは不十分であるが、形はスンナリとした平底の土器で底角は沼尻式土器のように丸みをおびた小波状口縁をもつものである。文様は横位にかなり深く沈線が走っている。この下頃辺遺跡出土の下頃辺式土器と平和遺跡で出土した「下頃辺式土器」とを比較してみよう。

前述したように平和遺跡のものはかなり多くのパターンの土器がみられる。施用具も様々である。器形もまた多くのパターンを含括している。このことは、更に分類が可能であるという要素を秘めている。事実、沢四郎氏は平和遺跡の「下頃辺式土器」について「沼尻式・東釧路I式・大樂毛式」土器の混合体であると指摘している。沢四郎氏の指摘は1967年調査のものについてであるが、このことは原則的には1970年調査のものについても言える。土器の実物に触れた場合よけいそのようなことが思えてならない。平和遺跡のような縄文文化期の聚落跡の場合、その竪穴住居跡から出土した土器を大別し細分することによって住居跡相互の前後関係も知ることができるもちろん、釧路で沢四郎氏の細分している平底土器群がセットして出土するのであれば問題はないが、最近の調査では層位関係をもって出土しているようである。このことの克服は適切な型式論を展開すること以外に方法はあるまい。そしてこのことは新たに設定された「下頃辺下層式土器」についても言えることであるが、本遺跡の調査

で一番問題なのはこのようなことではない。

遺跡地全体の4分の3を削り取られながらも、14基の堅穴の検出をみたことである。少なくとも14基の住居跡の前後関係及び14基を含めた全聚落跡の構造とその共同体としての位置を追求することが必要であったろう。即ち、一時期における聚落の世帯数を知り、その中における当時の人々の原始共同体の解明ととりくむべきであったろう。そして一共同体と一共同体との交通という問題も提起されてきたであろう。

いずれにしても縄文早期の住居跡が14基も発見されたのは例のないことであり、このことの説明なくしては本遺跡の研究の一程度の結論は得られないであろう。

6

吉野遺跡は、浦幌町字吉野230番地に位置する。昭和46年10月～11月にかけて、堀野昭氏と浦幌高校郷土研究部、筆者らが調査にあたった。報告書は現在編集中でその詳細について触ることはできないが、本遺跡の立地から考えて前述した下頃辺遺跡の一部にあたるものであると理解した方が無理がないであろう。

遺跡は、町道西八線と砂利採集のために削りとられた崖との間に位置し、下頃辺川の左岸にあたる。崖面には堅穴の断面が露呈していたため、これに合わせてグリットを組んだが、全掘した段階では、円形の平面プランをもつ堅穴住居跡の東側半分を完掘するにとどまり、西側はすでに削り取られて崩壊していた。堅穴住居跡は、5・45mの直径をもつもので、遺物は縄文早期に比定しうる土器片が多岐にわたって出土した。調査は立地条件の悪さから劣悪をきわめたが、当初考えていたよりも多数のバリエーションの土器片を検出し好結果を得た。しかし、下頃辺遺跡との距離関係及び同位段丘面という条件を考えて下頃辺式土器の出土を期待したが出土をみなかった。

7

以上、浦幌町内において1972（昭和47）年3月末までに調査の実施された5遺跡についてその概要と若干の問題点について触ってきた。

浦幌町にあっては、14ヶ所の遺跡が登録されているが、浦幌高校郷土研究クラブ及び浦幌町郷土博物館の調査によれば40ヶ所以上の遺跡の存在が確認されている。といつてもこれは、中浦幌以南の地域で北浦幌地区にまでその範囲を広げそばおそらく50ヶ所を越える遺跡の存在が確認できるものと予想されるのである。

（浦幌町郷土博物館）

引用文献

- ①斎藤米太郎「櫛目紋尖底土器を随伴する細石器遺跡」（『考古学雑誌』33—7）1943
- ②名取武光「北海道浦幌村吉野台遺跡」（『日本考古学年報』3）1950
- ③名取武光「浦幌新吉野台細石器遺跡」（『北海道文化財』2）1960
- ④芹沢長介「縄文文化」（『日本考古学講座』3）1956
- ⑤吉崎昌一「北海道のblade industryについて」（『西郊文化』14）1956
- ⑥斎藤武一・岩谷朝吉『東神楽14号遺跡』1959
- ⑦斎藤武一・有沢一則・岩谷朝吉・松下宣『富良野東山——北海道富良野町の石刃鎌文化の遺跡——』1966
- ⑧児玉作左衛門・大場利夫「湧別遺跡の発掘について」（『北方文化研究報告』13）1958
- ⑨大場利夫・奥田 寛『女満別遺跡』1960
- ⑩釧路市教育委員会『釧路市東釧路遺跡第II地点発掘調査概要』1968
- ⑪藤本英夫「静内田原遺跡について」（『せいゆう』4）1958
- ⑫河野広道「北海道の土器」（『郷土の科学』23）1959
- ⑬札幌西高等学校郷土研究部「夕張郡長沼町幌内タンネトウ遺跡略報」（『郷土の科学』26）1959
- ⑭吉崎昌一・芹沢長介「アイヌ以前の北海道——北方古代文化のナゾを探る——」（『科学読売』11—5）1959
- ⑮泉 靖一「シタコロベで土器を発見した話」（『釧路博物館新聞』93）1959
- ⑯吉崎昌一「北海道の夜明け前 13 初期の土

- 器文化（2）」（『北海道新聞』）1959
- ⑯浦幌高校郷土研究部『十勝太遺跡について』1967
- ⑰赤沢 威「北海道十勝郡浦幌町十勝太遺跡調査報告」（『人類学雑誌』75-2）1967
- ⑯浦幌高校郷土研究部『浦幌町を探る——その2——先史遺跡の現状——保護と対策について』1970
- ⑯大場利夫・明石博志「浦幌町新吉野平和遺跡調査概要」（『北海道考古学』4）1968
- ⑯浦幌町教育委員会『平和遺跡』1971

- ⑯山内清男『日本原始美術1』1964
- ⑯沢 四郎「道東における早期縄文土器の編年について」（『釧路史学』創刊号）1969

註1

赤沢 威氏が報告している「十勝太遺跡は、「十勝太河岸段丘遺跡」と登録されている遺跡であり、浦幌町教育委員会にあっても十勝太地域には数多くの遺跡が存在しているため、各遺跡毎に名前を付し、その遺跡名の上に「十勝太」という地名を冠している。

博物館日誌より



本館開館時に、浦幌町字万年行政区一同より寄贈されたもの。檜の木製で1902（明治35）年ごろの製作といわれる。1900（明治33）年、富山県・石川県より入植した人々が、豊作を祝い郷土にあつた、分達の手によりられた。「開拓獅子舞」を自ら編成し、始めとして普及し現この獅子頭はの手によって製造されている。

なお、この「開拓獅子舞」は、1965（昭和40）年3月、浦幌町指定文化財第1号（無形文化財）として保存がはかられるに至り、現在「浦幌開拓獅子舞保存会」および「浦幌高校郷土研究部」の手により伝承されている。

（後藤秀彦）



- 5月18日（木） 浦幌町立吉野小学校5年・6年生見学来館。同貴老路小学校2年・3年生見学来館。
- 6月 3日（土） 天塩郡幌延町社会教育委員視察のため来館。
- 6月 9日（金） 東十勝消防事務組合一行3名視察来館。
- 6月 14日（水） 浦幌町豊北婦人会員21名来館。
- 6月 19日（月） 浦幌町文化財審査委員長並郷土博物館運営委員会委員長齊藤 有氏来館。
- 6月 29日（木） 浦幌町光南婦人会員20名来館。
- 7月 6日（木） 雨龍郡雨龍町社会教育委員10名視察来館。
- 7月 25日（火） 中川郡幕別町議会議員一行視察来館。
- 7月 31日（月） 河東郡鹿追町立鹿追中学校2年生87名見学来館。
- 8月 3日（木） 河東郡音更町立鎮鍊小学校婦人会一行見学来館。
- 8月 6日（日） 川崎利夫・阿部 正氏来館
- 8月 11日（金） 昭和47年度第一回文化財審査委員会並郷土博物館運営審議会開催。
- 8月 17日（木） 文化庁阿部義平文部技官來訪。
- 8月 20日（日） Canada トロント大学学部長西里静彦氏来館。